君の物語

ササキヤス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君の物語

【Ｎコード】
Ｎ２７７０ＢＡ

【作者名】
ササキヤス

【あらすじ】
夢の中にいたと思ったらいつの間にか異世界へ。それは君を知るための物語。※よくある異世界召喚モノです。初作品で至らない点多々あると思いますがよろしくお願いします。

夢から夢へ（前書き）

初作品です。よろしくお願いします。

夢から夢へ

「ぎゃあああああああああああああああああす！！！！！」

お、お、お、落ちる！落ちる！落ちるって！！

俺は布団を蹴飛ばしながら飛び起きた。枕元の携帯を見る。その眩しさに眼を細める。不在着信3件、深夜3時26分、まだ真夜中だ。はあと大きな溜息を洩らし、汗でぐしゃぐしゃになった寝間着を取り替えるためベッドから降りた。
どうにも変な寝相でもしていたのか身体中が軋んでいる。

「泉（イズミ）、クマひでーぞ」

昨日の朝そう言って人のほっぺたつつきまくってたのは誰だったか。最近めっきり老け込んだ長身の男を思い出して、目覚めてから二度目の溜息。
多分今日も言われるんだろうなぁ、と俺は洗面所の鏡を見てまた深く溜息をついた。
・・・ああそうか。今日からあいつはいないんだっけか。そんなことを忘れているほど今の俺は疲れきっているようだ。
洗いたての寝間着は洗剤のいい香りがして少しだけ落ち着いた。
俺は思いっきりその香りを吸い込んで、眠れるかわからないけれど

ベッドに向かうことを決めたのだった。

汗でぐっしょり濡れたシーツは気持ち悪い。
湿り気の強いところから逃れるために寝返りを打つ。
ここ数日どうにも夢見が悪い。
真っ暗闇をただひたすら落ち続ける夢。それは暗いというよりひたすらに深い闇だ。
灯りがあれば回りが見えるとかそういうモノじゃない。ただそこに闇そのものがあるだけ。
その世界には前も後ろも右も左もない。
明晰夢みたいだ、と俺は勝手に思っている。
何せ随分意識がはっきりしている。夢のなかではっきりとこれは夢だと自覚できているのだ。
思考能力も割かしはっきりしているので、落ち続ける中でも緩やかに落ちている時間帯は、結構気楽に朝飯何食おうとか、あの木偶の坊をどう懲らしめようとか考えたりしている。

寝返りを打つ。湿っていた場所はキンと冷え、少しだけ火照った肌に心地よい。

あの夢を思い浮かべるとどんどん目が冴えていく。
寝不足は人の心を弱くするって、好きなＲＰＧのキャラが確か言っていたっけ。
どうせ見るならゲームの世界みたいな夢溢れる世界がいいなぁ、なんて。
自分の馬鹿らしさにまた溜息をついた。
微睡み重くなった瞼の先に、ただひとりの家族が見えた気がした。

いつの間にか俺は寝ていたらしい。
また俺は、落ちている。
一体どこまで俺は落ち続けるのか。
一体いつまで俺は落ち続けるのか。
ーーーだんだんと夢の中で意識が目覚めてゆく。
そして、落ちる恐怖にいつもどおり取り乱し始める頃合いに、それは起こった。

眩い光が視界に広がる。俺は思わず眼を細めた。
暗闇の中には気がつけばぼうと月が1つ、2つ、3つ、と浮かぶ。
夢の世界は月が3つの世界。よくできたファンタジーだ。
案外馬鹿な考えも悪いもんじゃないな。
夢に常識なんて必要ない。しかも何か見えるならいつもより格段にいい夢だ。
こんな夢なら、起きているよりも素晴らしいかも知れない。
次第に世界がはっきりと姿を現す。
雲ひとつ無い夜空にはたくさんの星。相変わらずの3つの月。
ああ、そうか俺は、仰向けに落ちているのか。
頬が冷たくなってきた。
風で寝間着が生き物のように呼吸を繰り返す。

「きれーな空だぁ」

大きな声で言ってみる。
東京の空は星が見えない、なんて歌詞によくあるけれど、ここの空は綺麗だ。
って星がいくらでも見えるど田舎育ちの俺が考えることじゃないか。
にしても寒い。
現実の俺は、ふとんを蹴飛ばして寝ているのか。
寝ぼけてすっぽんぽんなのか。

俺は――

「な、ななななんだこいつは！！！何処から落ちてきたんだ！！！！」

突然の声の方向を見やると、落ちる俺と並走するように落ちている少女がいた。

「おお、ついにこの夢に登場人物が・・・。感無量だ。」

俺は驚きのあまり完全に眼を醒ました。
俺は身体を突き抜ける風の冷たさに身震いをして、しっかりと眼を開ける。
その先には口を半開きにしてこっちを見ている先ほどの少女。
金髪、赤目。魔女っぽい三角帽子に黒の外套。いったいどこのファンタジーだこいつは。
どうにも俺の隣から俺の上空に移動をしたらしい。
こいつは落ちているんじゃなく自分の意思で飛んでいるんだ。
俺もこいつみたく制御できたらいいなぁ。

「・・・むう。魔力にあてられているのか。どうにも変だのう。――対象　魔力　放出」

少女が俺に指を指す。
あ？
え？
今のは？
頭が少女の言葉により一気に鮮明になる。
俺は改めて少女を見て、念のために空を見て、肌に感じる風をしっかりと確認してまず深呼吸をしてみた。しかし『だのう』ってなん

だ『だのう』って。ロリババアってやつかこいつ。
よし、もう一度現状を確認しよう。いや確認するまでもない。俺がしなければならない行動はもう決まりきっている。

「た、たたたたたたたた助けてくだひゃい・・・」
「！？」

目の前の老婆系少女に土下座する勢いで頼んだ。
恥も外聞もない。というかそんなこと頭の片隅にすらない。
ちなみに空中で土下座する勢いで頼み込むとどうなるかの結果は

「ひっひぎゃあああ！！おち、おち、おち、おちおちおち」
「・・・もう落ちているではないか・・・・」
「落ちるー！！」

曲がりなりにも先ほどまで安定していた落下が風圧で一気にアンバランスになるということだった。
少女は聞こえよがしに大きな溜息をついた。

「はあああ・・・。未熟な魔術師かなんなのか知らんが情けないことだ。
貴様も魔道の端くれにあるものならシャキッとせんかシャキっと！」
「い、いいから早く助けて！！！死ぬ！死ぬって！！」
「ああああもう鬱陶しい。他人に飛翔術をかけるなどしたことないわ。
まあ良い、ちょっと荒っぽいがなんとかなるじゃろ。ーーー人は、
地に足をつけるものなるべし」

その瞬間、俺の落下は先程の比ではなくなった。

「うわあああ！！は、早くなってる！！早くなってるって！！！！」
やけに頭に響く言葉の後、急に早くなった落下速度。その異常事態の不可思議レベルなんて全く問題にならない。
このままじゃ死ぬ！間違いなく死んでしまう！！地面にべちゃっと！！！

「どうせ死ぬなら綺麗に死にたいいいいい！！！！！」
「ええええい！！ウルサイ！！落ち着かんか！！されど、大地は、人の仔を祝福するもの。故に大地は仔らを許し、全てを受け止める！！！」

暴れまわっているうちに俺は下を見ていた。
外界はどこまでも続く原っぱ。どんどん近づいてゆく。
ああ、父ちゃん、母ちゃん、ご先祖様、今、泉はそちらに向かいます。
やっぱ痛いのかなぁなんて思いつつ、俺は衝撃に身を備える。
ーーー不意に世界が急転する。
気がつくとふわりと俺はその原っぱの上に立っていた。
ここが、天国？地獄？
なんて考えているうちにまた世界は真っ黒に染まった。

「ククク・・・フッフッフ、ブフォッ！・・・ハァーハッハッハ！！適当な言語魔術が成功するとはやはりこの私、稀代の魔女エルルカ＝もうフィンは大天才！！・・・しっかし私が大天才だというのを抜きにしてもこいつ魔力抵抗も糞もないではないか。一体何だというのだコヤツは・・・」
薄れていく感覚の中、あの少女のようなババアのような子の悪役臭

い三段笑いが聞こえていた。

ドタドタと狭いリビングに雪崩込む3人の男たち。
突然のことだったか滅茶苦茶びっくりしたんだよなぁ。いやこのときは変なお客さんだなぁなんて思ってたんだっけ。正直、ココらへんは結構曖昧なんだ、記憶。
「な、誰だ！」
大きな声を上げるこの人は確か俺のお父さん。メガネなんかかけて随分とお堅そうな人。全然似てないだろ俺と。まあ本当にこの人がお父さんかなんて確かめる方法ないから便宜上お父さんって呼んでるだけなんだけど。
俺をきつく抱きしめてる日本人形みたいな綺麗な若い女の人は、流れからいくとお母さんらしい。こっちも全然似ていないだろ。
「薊（アザミ）ィィ、会いたかったぞぉ」
このダミ声の人はお父さんの知り合いらしい。このおじさん、吉田さんとは何回か会ったことあるよ。結構な額のお年玉をくれる人。金持ちなのかな。今、お父さんに刺さってるナイフはトウノ曰く結構お値打ちらしい。
「あ、あ」
この間抜けな声は俺か。ああなんか小さい時の姿人に見られるの恥ずかしいなぁ。
このときは正直何が何だかわからなくて結構ぼうっとしてたんだ。後この女の人の抱きしめる力が思いの外強くてさ、結構痛くて苦しかったの覚えてる。
・・・そうだ、この人はすっごく震えていた。
この人がさっきから何も喋らないのは多分怖かったからだと思う。
男たちの一人、ぶくぶくと太ったおじさん、豚の蚊取り線香に似

ている人がニヤニヤ笑いながら女の人に近づいてく。豚の蚊取り線香知らない？偉そうな割りに何も知らないなぁお前。この人のことはトウノは教えてくれなかった。
「花珠（カジュ）、ずいぶんと久しぶりだなあ」

プツン。
か弱い糸が途切れるような、そんな間抜けな音がしてまた世界は真っ暗になる。

うわっ。ん、ああそうかここからの記憶が俺暫くないんだ。
この後何があったか、か？
んー、トウノから聞いた話だけど、この女の人はこの豚おっさんにレイプされて薬漬けにされて
どっかの国に売られるらしいよ。
一体どこの都市伝説だよって感じだよな。
ま、三流の悲劇ってヤツかな。トウノは花珠さんは運が悪かったと言ってた。俺もそう思うよ。
ああ、トウノって言うのはそこにいる木偶の坊のこと。
・・・そういえば、アイツ、このときどんな顔してたんだろ

そう思って俺は一人ぼけっと突っ立っている長身の、3人の中では一番若い男を見た。
ああ、この前とおんなじ。今にも泣きそうな顔で、俺を

「あいつはこんなときもぼけーっとしてたのか。」
俺はあののっぺりした薄い顔を思い出して、ムカッとしながら眼を醒ました。
まあ若いときはそこそこ男前とも言えなくはないか。
「あー、最悪の目覚めだ。」

「トウノとかいう男がお前の親代わりだったのか？」
「あいつが親？そんな訳あるか。出かけてはひと月ぶらぶら帰らないで偶に帰ってきても家事も何もしない、本当の役立たず。・・・まあ、金とかは出してくれてるからそこそこ感謝はしているけど」
「・・・そうか。」
ん？俺今誰と話してるんだ。つーか家に勝手に入ってるこのガキンチョはどっかで・・・。
「あああああー！！！夢で俺を助けてくれたロリババア！！」
なんで夢の住人がリアルでまでいるんだ。それにしてもさっきの夢は酷かったなーなんて寝起き頭で考えてると空気が不意に変わった。ロリババアの方を見やると、青筋立ててこっちを睨んでいる。
「ほう、最強魔女エルルカ様を捕まえて今なんと言った貴様」
随分ご立腹なようだが見た目がハロウィンの仮装で本格的なコスプレをしている白人美少女なので全く怖くない。
おまけに先ほどから動く度に三角帽子のツバに乗っかった鈴がチリン、と可愛らしい音を立てているのが微笑ましい。
「どーでもいいけど部屋の中で帽子被ってたら禿げるぞ、ロリババア。んでなんで人んちにいるんだよ」
ちょっと言いすぎだかな。俯いてプルプルと震える少女。ちょっとババアって言いすぎたかな。１０秒経ったか経ってないうちに勢い良く少女が顔を上げ、真っ赤な瞳で俺を睨みつける。おお、完璧に怒っていらっしゃる。
「だ」
一歩、その少女は近づいてくる。きゅ、急に寒気が。
「れ」
その赤の瞳に射すくめられ俺は固まった。そういやこの部屋俺の部

屋じゃないなー、なんてちょっと冷静になってみたり。

「が」

ピッチャー振りかぶって第一球。ということはさっきのアレは現実・・・？

「ババアじゃ！糞ガキが！！！！」

ドゴォっと音がして鳩尾に綺麗にめりこむロリババア（仮）の拳骨を見てまた俺は意識を手放すのであった。

夢から夢へ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

魔女と使い魔

「連絡ご苦労。さっさと主の元へ帰れ。真夜中にレディの家に長居するでない」

明け方の空へ一羽のカラスが飛び立ってゆく。ようやく白んできた空は雲１つなく今日は快晴になることだろう。

石作りの重厚な部屋で彼女、エルルカ＝フィンは苛立ちをその小さな身体一杯で表現していた。
幾度も足を組み換え、舌打ちをならし、手元のキセルを思いっきり吸いては白煙を吐き、陶器のコップの中の酒を一息に呷る。ちなみにこの酒は赤の国特産の『辛い実』の酒。度数は８０％を超える。
目の前にはすやすやと暢気に眠る先ほど墜落していた少年。
最初は飛翔魔術の失敗かと思っていたがどうにも事情は複雑なようであった。
彼はどうやら異世界からの召喚者、しかも人間が暮らす世界から召喚された者らしい。
異世界からの召喚それ自体は、彼女の暮らす世界、通称銀大陸では大した珍しいことではない。
召喚術師という職業の存在が示すように、異世界の存在は公に認められているからだ。
人格をしっかり持ち、人型をした魔物を異世界から呼び出すことができる以上、人間が普通に暮らす世界があってそこから呼び出される人間がいてもおかしくはない。
しかし、彼女エルルカの目の前の少年が抱えている問題は簡単なことではなかった。
普通の召喚であれば召喚者と召喚された者の間に契約が取り交わさ

れるが、少年には召喚者が存在しない。
通常召喚された者は、召喚者の魔力の供給が僅かでも必要である。
魔力自体は大源を変換すれば良いのだが、世界に存在している表明をする魔力は召喚者から供給されたものでなくてはならない。
ところがこの少年には何処からも魔力の供給はなく、契約魔方陣も見当たらない。
それだけならば勘違いでただの一般人だと言えたのだが、原因不明の空間の歪みが補足されていることを先ほどの報せでエルルカは知った。そして通告なしの召喚術行使を行った召喚師を捕えるために教会騎士団が動いていることも。
召喚者がいれば召喚者にとりあえずの罰金、または研究成果の没収。酷い場合は保護観察もこれに加わる。
しかし召喚者が不在の召喚、基本的にそういった場合は召喚獣が主を殺したことがほとんどであるため、そういったイレギュラーはエルルカの住む白の国では処分対象、すなわち死刑、それが珍しい素体であれば生涯実験道具となることは確定事項だ。

「胸糞悪い話だとは思わないか、フィーレ」
そう呼ばれた真っ赤な髪の青年は頷く。
「しかし、随分と記憶の構成が滅茶苦茶だな。父母の死亡前後の記憶が全くないのは精神的ダメージを慮れば仕方がないとしよう。しかし映像で見る限り、この頃は5、6歳、それ以前の記憶が全くないことはありえん。記憶を何らかのショックで失ったか、蓋をしているか。ふむ、もう少し調べて見るか・・・」

そう言って持っていたキセルを少年に翳そうとするエルルカをフィーレはじっと見つめる。
単純な腕力ではエルルカより数十倍上の炎霊のその視線は非常に冷たい。

「じょ、冗談だよ、冗談。しかし一応この国にも法というものはある。異世界からの召喚者は契約が無い限り殺さねばならんぞ。お前もわかっていようフィーレ」
「存じております。しかし主よ、彼の処分については、どうにかお情けを与えることはまかりなりませんか」
「私も一応大天才とは言え一国民だぞ。法を破ることを勧めるとは秩序の炎の体現者たるお前らしくもない」
「改めて、どうにかお情けを与えることは罷りませんか、と申し上げます」
「・・・っち。ああもう炎の精霊様はお優しいことだな！」

使い魔を睨みつけていた陰険な眼を抑え、柔らかく眼を細めながらエルルカは眠り続けている少年に眼を向ける。歳の頃は１４、５。身長は１６０スイル（１スイル＝１センチメートル）を越えたばかりか。
自分の歳の十分の一かと思うと余計にさっきババアと言われたことが腹立ってきて、彼女には珍しい優しげな顔が歪み始める。

「・・・主が保護する気がないのなら私が保護を」
エルルカの怒りの雰囲気を感じたのか、鈍色の瞳が、彼の仕えている主人を睨むように見つめる。
「ええい、お前は本当に冗談が通じないな！こいつは！この私！稀代の魔女にして白き炎の魔術師、エルルカ＝フィンが保護するっ！文句を行ってくるならば国の連中も黙らせる！これは誓約だっ、二言はない！これでいいかっ！この筋肉ダルマめ！！」
「さすが主、賢明なご判断です。」
安心したのか、フィーレはほっと胸を撫で下ろす。
フィーレとて本気で主を疑っていたわけではない。召喚に応じたときからその魔女の本質をフィーレは知っていた。
超がつくほどのお人好し。

人に騙されても、それを自分の未熟だと恥じ、復讐よりも自己の研鑽を選ぶ。
戦乱のあるを風聞しては、金稼ぎと称して、薬をタダ同然で配りに行く。
彼が仕えている主はそんな人物だ。
しかし、そんな魔女失格の魔女も一応は人間。
彼女の暮らす白の国の法、しかも第一法、すなわち刑執行の優先順位が高い法を見逃すのは難しいかも知れないと彼は考えていた。
無論、それは杞憂に終わったが。

「しかしどのようにして黙らせるのです？如何に主とて、第一法を破っては・・・」
「まあ間違いなく糞ガキ没収の上国外追放、酷くて死刑であろうな。」
「・・・何かお考えがあるのでしょう？」
「フン。・・・まあな。そろそろこんな国飽きてきたであろう？フィーレよ。」
「ま、まさか、お、お一人で戦争でもなさるおつもりですかっ！」
フィーレは自分の仕える主が、喧嘩っ早いことを思い出してその褐色の肌を青ざめさせた。
「んな訳あるかっ！この筋肉ファイヤー！引っ越すんだよ！！私を何だと考えているんだっ！」
「・・・常に自身の力のなさを憂いている、心優しき魔術師にして偉大なる魔女、ウィズリルの意思を継ぐ当世ただ一人の正統継承の魔女です。」
「・・・全く調子のいいことだ。まあいいっ！そうとなればさっさとずらかるぞ！お前は荷造りしろ！私は、そうさな、とりあえずはあのメスガキに話をつけてくる！」
「彼はどうするのです？」
「起きても暴れないようにベッドに縛り付けとけ！運ぶときは魔法

の鞄につっこんどく！」
「少々手荒ですが、それが一番安全ですな。承服しました。」
ドタドタと足早に部屋を後にした主を見送り、フィーレはどこからともかく皮製の紐を手にし、規則正しく寝息を立てている少年を見つめた。

「おい！」
エルルカの声が回路を通してフィーレの頭に響き渡る。
「先ほど言うのを忘れたが、私を説明するときは大天才というのをきちんとつけとけ！このヤンキーヘアー！」
「・・・了解致しました。マスター」

顔を赤く染めながら、プンプンと本当に聞こえるように怒っているであろう自らの主人を思い浮かべ、炎の精霊はその厳しい顔を柔らかく微笑ませた。

魔女と使い魔（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

魔女と使い魔？

「あ、あのここは何処でしょうか。」
返事はない。
「ど、どうして俺を縛っているんでしょうか。」
返事はない。

「あ、あのー」
「む、動かないで頂きたい。縛ることが困難になる」
「し、失礼しました・・・」

ロリババアに殴られ気絶して眼が覚めたら髪が真っ赤で、上半身裸のマッチョに俺は縛られている最中だった。
ああ、夢なら覚めたい。
確かに俺は偶にそっちの気があるんじゃないかと人に言われることはある。
女の子と話すのは苦手だし、いっつも得体の知れないおっさんの面倒見てるせいだ。
しかし一応健全な思春期男子。何が悲しくてこんな筋肉に縛られなきゃいけないんだ。
別に男でも見惚れるくらい均整の取れた美しい肢体に嫉妬している訳ではない。
なんだ肢体って、官能めいた表現だ、本当に誤解受けちまう。
ともかく俺はそっちの人じゃないし、こんな筋肉別に羨ましくなんかない！
ああもうあれもこれもそれも全部トウノのせいだ。
あいつがあの時家にいたら多分助けてくれたはずなのに。
俺は偶には便りになる、あの男を思い出す。
いや、こういう考えが俺がホモ扱いされる所以なのか。

くう、ともかくこの現状を打破せねば。

「あのここは何処でしょうか」
勇気を振り絞って先ほどの質問をもう一度言う。
筋肉野郎は意思の強そうな眼でぎっと俺を見ている。う、怖い。

「・・・ここは、白き炎の魔術師、現存するただ一人の魔女、大天才エルルカ＝フィン様の城だ」
魔術師？魔女？つーか大天才ってなんだよ、なんでもでかけりゃいいってもんじゃないぞ。

「あの魔術師って、いったい・・・？」
「ふむ、泉殿は異世界から召喚されたのだ。知識が無くて当然だろう。しかし私も主から説明を許されている立場では無いのだ。申し訳ないが主が帰ってくるまで暫し待っていてくれ」
「はぁ・・・」

こりゃ駄目だ。悪い奴じゃきっとないんだろうけど頭堅そうだし。
筋肉が多いからだなきっと。
異世界？魔術師？魔女？なんで上半身裸？気になることはたくさんあるけれど、これ以上は今は多分無理だ。
きっとこれが覆面の人たちとかに拉致されてたらもっと混乱していたのだろうが、ここまで現実感ないと返って落ち着くことができる。

俺は辺りを見回してみる。
石造りの部屋は6畳の俺の部屋が3つ4つ入りそうな広さ。といっても俺が見える範囲部分だけなので正確なものはわからない。
俺が寝ているベッドはかなりでかく、天蓋付き。俗に言うお姫様ベッドってヤツだなこれは。

隣には小さな丸いテーブルと立派な椅子。テーブルの上には凝った装飾の陶製コップと酒らしき瓶。この酒をあの筋肉が飲んでたら様になるだろうな。むむ、何か腹立つぞ。
ざっと見渡すかぎりこんなもんか。この部屋ベッド以外ほとんどないみたいだ。
時刻は窓から差し込む灯りから見て夜ではなさそうだ。

「泉殿」
「はい？ってなんで俺の名前」
「今は混乱しているかも知れないが決して悪いようにはしない。どうか主を信じて待っていて欲しい」

俺は何も言えなかった。
さっきまで怖いと思ってた瞳が思いの外優しそうで、もしかしたらもう二度と会えないただ一人の家族を思い出していたのかも知れない。
俺が必死で何か言おうと考えていると、木製のドアが勢い良く開かれた。

「帰ったぞフィーレ、そして今すぐ支度せよ、紫の国の城に行く！」
部屋に駆け込んできたのは先程の金髪ロリババア。いやババアって言ったらぶん殴られたんだったっけ。うん、次から気をつけよう。

「お早いお帰りで。一体どちらに行っていたのです？」
「教会の将軍様のところだよ。あのガキ、少し脅したらすぐ膝を折りおった。全く情けない！・・・しかし幸運だった。時間稼ぎが効いてる内にずらかるぞ」
「リラ様のことです。こちらの事情もお見通しだったのでしょう。準備はもうできております」

「ふん、どうだか。あいつはいつまで経っても不肖の弟子だからなっ」

2人の会話に入っていけずにいると、少女が俺を見て舌打ちをする。

「む、起きているのか。フィーレ、さっさとこいつも鞄に詰め込まんか。まさか連れて歩いてく訳もいくまい」

「主よ、その件に関してですが、彼を連れて歩いて行きましょう。その方が彼の為になるはずです」

「何を悠長なことを言っている！紫の国までなんのアシも使わんかったら三ヶ月はかかるぞ！教会の連中の足止めもせいぜい1週間がいいとこだ」

さっきの話からするとこいつがエル、エルなんだっけ。とにかく大天才様か。

「しかし、泉殿はこれからこの世界で暮らさなければならないのです。召喚者を探すにせよ、何にせよある程度独立独歩できる力は必須です。これは良い機会ではないですか」

そしてこの筋肉はフィーレと言うようだ。それにしてもやっぱり帰られないのかな。

「何を言っているんだ馬鹿者！そんなの紫の国に行ってから考えれば良い話だ。今はそんなことやってる場合じゃない！」

そういえばムラサキの国って何だ。ムラサキって色の紫のことか？すごい国名もあったもんだ。

「主のことです。どうせ落ち着いたところで何かと面倒を焼きすぎ

て彼の自主性を奪うことになるだけでしょう」
「な、ナナナ何を！私は大天才だぞ！そんな温いことあるか！」
「彼は随分線が細い。あなたの好みではありませんか」
な、なんだと、線が細いだと！このそりゃあ俺はお前みたく筋肉ないけどさ。
言っていいことと悪いことがある。
「ええい、いい加減にしろ！立場を弁えよ！」
全くだ！
大天才様はキィーッとばかりに腕を振り回している。
「これは失礼致しました。しかし、既に三人分の旅支度はできておりますし」
「この馬鹿炎！ん、いや待て。・・・今までになく強引じゃないか？理由を言え」
「・・・彼は召喚術師としての素晴らしい適性を持っています」
ショウカンジュツシ？召喚ってアレかサモナーってヤツかな？異世界にきて能力ゲットって有りがちな話だ。
「ふむ、いやなるほど。お前ほど気位の高い精霊が言うのだ間違い無いだろう、だがそれだけではあるまい」
「はい。鞄の中には魔術具も多く含まれます。ですから鞄に閉じ込めるのは危険な可能性があります。」
「どういうことだ。さっぱり意味がわからんぞ」
「自分で言うのもなんですが、この私でも惹かれるほどの魔力色なのです。封印されている魔物その他が出てくる危険もあります。・・・幸いこの部屋は結界があるので平気ですが非常に危険です。」

「それは本当か。こいつ大して魔力もないように感じるが」
「間違いありません。魔力量はともかく魔力色は異常です」
「ふん、イレギュラーはやはりイレギュラーというわけか。よろしい、こいつも連れてく。支度は任せたぞ。」
「はい、ありがとうございます。」
「後それと私に舐めたこと言った罰は存分に受けて貰うぞ、フィーレ！」
「はい、覚悟しております」

どうやら話が終わったみたいで、フィーレとか言う男が俺を縛り付けている紐を一本一本外していく。

「あ、あの」

いろいろ聞きたいことはあるが、上手く言葉にできない。何か一番大切なことを。

「やっぱり帰られないんですか？」

「ふん、自分の現状を把握できる程度の知能はあるか。その答えは『そんなもんは知らんしわからん』だ。とりあえず帰られる可能性を少しでも高めたいのならこの私に感謝し尽くすことだ！」

「はぁ・・・」

「詳しい事情は後で話す。どうせ時間はあるんだ。お前は因果律からも外れてるだろうからな。ゆっくりじっくり教えてやろう。この大天才エルルカ様がな。まあ取り敢えずは簡単に説明してやろう。オマエ異世界からきた、ワタシ大天才、この筋肉ワタシの奴隷。オマエ殺される。ワタシオマエ助けてやる。」

なんで片言なんだ。うーん、どうにもこの子と話していると気が抜けてしまうというかなんというか。テレビや雑誌でも見ないような美少女だけれどその偉そうな喋り方はギャップが激しすぎてどうにも奇妙だ。にしても何が何だかさっぱり解らない。だけど絶対に帰られないという訳でもないという事実は少なからず俺を安心させた。

「外し終わりました。泉殿、こちらに服を用意してあります。着替えてください」

いつの間にか男の手には木綿っぽい薄茶の素材の服っぽい何かがあった。

俺は起き上がりそれを手にとる。なんだこりゃ。広げてみるとそれは長方形の袋みたくなっていて、頭と腕の位置らしきところに穴が空いている。これがもしかして貫頭衣ってやつかな。

「着方がわからないのであれば手伝いますが」

「いえっ！いらないです！全然大丈夫ですっ！自分で着られます！」

「そうですか」

少しフィーレさんが残念そうな顔をしたのは置いておこう。

とりあえず、寝間着脱ごう、と指を上着のボタンに掛けたとき、べっとりと纏わり付くような視線を感じた。

「はぁっ、はぁっ・・・」

見てる。滅茶苦茶見てる。エルルカがじいっと俺の一挙一動全てを見逃すまいとこちらを見ている。

「ど、どうした、早く着替えんか。」

「・・・」

うう脱ぎにくい。しかもエルルカだけでなくフィーレさんの視線も感じる。

「主よ、着替えにくいようです。暫く部屋を出ていましょう」

意を決して脱ごうとすると意外にもフィーレさんの助け舟があった。渋々といった様子でエルルカは部屋を出ていく。変態ロリババアとかもうアイツはダメダメだな。

「ふー」

ようやっと着替え始めることができた。しかし適当な服だなぁ。俺でも作れるんじゃないかコレ。

とりあえず下着姿になり、被るようにして貫頭衣を着る。着る前は大きく見えたが案外、サイズは丁度よかった。

それと最初はゴワゴワしてるのかなぁと思っていたけど、結構肌に心地よい硬さで気持ちいい。

少し肌寒いけどまあ、動いたりしたら暖かくなるだろう。

「あのー、着たんですが」

俺が呼びかけるとギイと音を立ててドアが開いた。

「それではこの紐で腹の辺りを結んでください。背中に紐を通す穴があります。」

先ほどまで俺を縛っていた紐よりは太く黒い革素材の紐を言うとおりに背中の穴に通し腹の辺りで縛る。
ベルトのようなものだろう。

「この紐は魔術的措置がなされており、魔力色をある程度意図せずにでも隠せるようになります。努々外さないように」

「はぁ」

魔術だか魔力だか滅茶苦茶ファンタジーな世界だということは認識できた。取り敢えずは放って置くしかない。

「おい待て、フィーレ。そんな高度な魔術道具、私は知らんぞ。というかそいつがあるなら別に鞄でもいいじゃないか。」

「まあ良いではありませんか。さてもう時間もありません、さっさと出ましょう」

「待て待て！納得行かん！お前その魔術道具一体本当にどうしたんだ！まさか・・・」

「買いました。城の金塊が減ったのに気がつかなかったのですか？泉殿、これを羽織ってください。その衣服は一応結界魔術がかけられておりますので見た目以上に安全なんですよ」

そう言ってフィーレさんは俺に藍色のフード付きのマントを手渡した。少し寒かったから有難い。どうやって着るのかよくわからないので、フィーレさんに着せてもらう。近くに立つとやっぱりデカイ。悔しい。

「勝手に話を進めるな！フィーレ、私が、この私が百年以上かけて溜め込んだお宝を使ったというのか！一体いつの間に使ったんだこの戯け！」

「申し訳ありませんがいつだったか正確に記憶しておりません。・・・これで良し。靴はこれを。これは炎の精霊が作った靴です。僅かですが体力の底上げをしてくれますし、何より頑丈です。お履きください」

差し出された靴は茶色いブーツ。精霊が作ったってどういうことだ。サイズは大きいように見えたが履くと丁度良い。

「精霊の作った衣服は、装着したもののサイズに合う魔術がかけられているのですよ」

フィーレさんは不思議な顔をしている俺に微笑む。なるほど、それは便利だ。しかもすごく軽い。ブーツだけど走るのも楽そうだ。

「精霊の作ったブーツだと！お前使い魔だから霊具は作れないと言ってじゃないか！」

「ですから友人から以前譲ってもらったのです」

「あああもうお前、本当にいい加減に・・・」

「それでは行きましょう。主、泉殿。」

そう言ってフィーレさんは足元の鞄を手に取る。たぶんアレがさっきから話題に上っている鞄だろう。

俺はその広い背中を追う。というやっぱり外でもこの人上半身裸な

のか。寒くないのかな。露出狂？

「お前勢いで誤魔化そうとしてるだろ！というか良く考えたら鞄に入れようがどうしようが、魔物を惹きつける魔力色なら関係ないではないか！おのれ、主を騙すとは何事か！」

後ろから怒鳴りながらドタドタと追いかけてくるエルルカが何だかおかしくて俺は何となくほっとした気持ちになった。

そういえばトウノ以外の人と話すのは久しぶりだったな。

そんなこと考えて、これから自分がどうなるかなんて、不安なことを考えることを避けていたのかも知れない。

魔女と使い魔？（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2770ba/

君の物語

2012年1月7日01時51分発行